

はじめに

ライプニッツの中期の著述『形而上学叙説』ならびにそれに続くアルノーとの往復書簡、そしてそれ以後にかかれた、彼の実体論を読むとき、常に悩まされるのは、彼にとって実体 *substance* とは何であるのか、という根本的な問題である。ライプニッツが、特に優れて実体であるものを「アレクサンドル大王」のような個的な存在者であると考えていたのは間違いない。ところが、その一方で、個的な実体（アレクサンドル大王）を構成する身体および魂を、ライプニッツが、それぞれ実体とみなしていると思われる箇所も散見される。しかし、身体も魂が別の実体であるとするれば、身体と魂からなる存在者が、個的な実体である、ということは果たして可能なのか。これが我々の問題である。

1. 実体の基本的理解

個的な実体を構成する心身が、それぞれ別実体であることは可能か。このことを検討するために、まず、我々は、実体に関するライプニッツの基本的理解について確認したい。ここで重要と思われるのは、「働きは *suppositum* に属する *actiones sunt suppositorum*」というスコラの原則的な主張である。このスコラの原則は、『形而上学叙説』第8節において、神と被造物という、異なる実体の働きの区別を行うという文脈で持ち出される¹。では彼において「働きは *suppositum* に属する」ことは、どのように理解されたか。彼は、*suppositum* を「個体実体」*la substance individuelle* に等しいものと理解し、「働きは *suppositum* に属する」とは「働きは個体実体に属する」と解釈する。ここでいう「働き」とは、むろん個体実体の働きである。したがって、個体実体の働きは、すべて、個体実体に属するということになる。

ここで言われる「働き *actiones*」とはなにか。彼は、個体実体の働きを、単に能動的な働きとは考えてはいない。彼は、「能動的な働きと受動的な働き *passions* は、本性的に、個体実体に属する」ことが「働きは *suppositum* に属する」の意味だとみなしている²。彼にとっては、他から受ける働きに他ならない、受動も、個体実体に属するのである。

受動的な働きも個体実体に属するとは、他から受ける働きも、当該の個体実体の働きに含まれることに他ならない。しかし個体実体の働きのうちに、受動的な働きも含まれるならば、彼が当初目指していた、異なる実体の働きの区別は困難になるのではあるまいか。というのも、ある実体の受動的な働きは、他の実体の能動的な働きでもある。そうだとすると、このように他の実体

¹ 『形而上学叙説』(以下「DM」), VIII. Gottfried Wilhelm Leibniz, *Philosophische*. Ed. Deutsche Akademie der Wissenschaften. Berlin. (以下「A」), 6-4. Teil B. pp. 1539.

² Ibid. 「能動的な働きと受動的な働きは、本性的に、個体実体に属する（働きは *suppositum* に属する）」。「*les actions et passions appartiennent proprement aux substances individuelles (actiones sunt suppositorum)*」.

から働きを受けた実体が、さらに自身も能動的な働きをするとき、その実体の能動的な働きは、先の実体の能動的な働きに結局還元されることにはなりはしないか、と思われるからである。

このことを見るために、ここで、ライプニッツが考える個体実体の働きとはどのようなものか、見てみよう。彼は、個体実体の働きとは、個体実体に生じるすべての出来事だと考える。興味深いのは、個体実体に生じる出来事には、その当該の実体と他の実体の関係も含まれる³と彼が考えていることである。このように、個体実体に生じる出来事には他の実体との関係も含まれる、ということから、彼は、最終的には、世界すべての事象連関が、当該の実体に相関することになる、と考える⁴。個体実体は、自己を取り巻く世界すべての出来事も、自己に相関するものとして、その働きに含めるというのである。このように、個体実体が、世界のすべての出来事を自己に相関するものとして、自己の働きに含めることを、ライプニッツは、「個体実体は、世界すべての出来事を、その個体実体の概念 *la notion de la substance individuelle* に含んでいる」と表現する⁵。

個体実体が、世界の他のものとの関係をすべて、自己の働きとして含むとは、個体実体が、世界の他のものとの関係をすべて、個体実体の概念に含むということに他ならない。そして、個体実体が、その概念のうちに、他のものとの関係をすべて含んでいる、ということから、彼は、個体実体は、他の実体から働きを受けることも、他の実体に働きを与えることもない、と結論する。彼によれば「個体実体の概念はすべての現象を包摂している結果、個体実体に固有な基礎 *fond* から生じないものはいかなるものも個体実体には生じない」のである⁶。個体実体は、他の実体との関係をもすべて世界の事象系列として含んでいるがゆえに、他の実体から働きを受けることも、働きを与える必要もないのである。

以上から、働きを受けることも、働きを与えることもない個体実体は、優れた意味で、働きの自律性を有する。さて、ここで、我々の当初の問題である、心身の関係に眼を移すことにしよう。心身は本性上区別されるものであることをライプニッツも認める。身体の働きは物的なものであり、魂の働きは非物的なものである。このように心身は異なる本性を持つ。しかし他方で、心身は、一方の働きに応じてもう一方が変化するという、緊密な対応関係を持つ。こうした心身の働きの相互的な対応関係を、ライプニッツは、心身の結合 *union* と呼んでいる。ではこうした心身の結合はどのように説明されるか。働きの異なる心身の結合を、ライプニッツは、個体実体の結合関係として説明している。ここから、心身は、彼にとって異なる個体実体を意味すると考えるのはきわめて自然だと思われる。

ところが、驚くことに、彼は、心身を異なる個体実体とは考えない。というのも、ライプニッツにとって個体実体とは、アレクサンドル大王のような存在者を指すのである⁷。アレクサンドル大王は、身体も魂もともに兼ね備えたものだとライプニッツは考える。よって、身体も魂も、

³ Ibid..

⁴ Ibid.

⁵ Ibid.

⁶ DM. XIV.A.6-4.TeilB. pp.1541.

⁷ DM. XIII.A.6-4.Teil.B. pp.1540.

アレクサンドル大王という個的な実体の身体ないしは魂として存在するのであり、別々の個体実体ではないのである。

心身の結合を、個体実体の結合としてライプニッツは説明しているにもかかわらず、彼にとって心身は異なる二つの個体実体ではない。心身はそれら二つで一つの個体実体なのである。このことをどう理解すべきか。このことを見るために、我々は、まず、彼が、心身の結合を、個体実体の結合として説明するプロセスを以下で追いかけてみたい。

2. 予定調和説

心身の結合問題は、ライプニッツ自身も認めるように、デカルトに由来し、かつ、デカルト主義者が抱えてきた難問である。しかしなぜそこまで心身の結合が問題なのか。それは、デカルトおよびデカルト主義者にとって、魂は思考するもの *res cogitans* であり、身体は延長するもの *res extensa* という、実体として異なるものとみなされてきたからに他ならない。デカルトおよびデカルト主義者にとって、実体とは、存在するのに他のものを必要としない、自律した存在者である⁸。では、存在するのに他を必要としない身体と魂の間に、一方の働きに応じて他方の働きが生じる、という、密接な対応関係にあるのはどうしてか。（たとえば、刺されたとき、痛みを感じる）。このように心身の結合の問題は、実体の結合の問題として理解されるのである。

ライプニッツは、『形而上学叙説』や『アルノー宛書簡』の時期のみならず、後年にいたるまで繰り返し、心身の結合問題について論じている。そして彼は、心身の結合の問題を、実体の結合の問題とみなす、デカルト主義者の問題を、自身の問題とし、最終的に、独自の解決を提示している。ではライプニッツは実体の結合をどのように考えるのか。彼は、実体の結合の問題は、実は、個体実体は自身に生じることをすべてその概念に含む、個体実体の特性から解決できるのだという。しかし、個体実体が自身に生じることをすべてその概念に含む、と考えることは、実体間の働きの伝達は不可能だと考えることに等しい。それにもかかわらず、なぜ、実体の結合は、個体実体の概念の理解に基づいて説明できるというのか。彼は次のように言う。

私は、そのこと（心身の結合）を自然的な仕方によって説明する。実体概念ないしは一般に完全な存在者の概念は、実体の現在の状態が常にその実体の以前の状態の本性的な帰結であるようにするのだが、こうした実体の概念によって、各個体実体、そして結果的には、あらゆる魂は、本性上、世界を表現することになるのである。個体実体ないし魂は、自己の本性に固有な法則により、もろもろの物体、中でも、自身の身体に生じることに一致することが、魂にも生じるべく、あらかじめ創られていた。⁹

⁸ デカルト『哲学原理』第1部51節, Descartes, *Principia Philosophiae*(1644), : 'Per Substantiam nihil aliud quam intelligere possumus, quam rem quae ita existit, ut nulla alia re indigeat ad existendum...'. 「実体（という語）によって我々が解するのは、存在するのに他のいかなる事物も必要とせず存在する事物に他ならない」。

⁹ 『ライプニッツ＝アルノー往復書簡』（1687年10月9日）, GPII, pp.113-114. : 'pour moy je l'explique d'une maniere naturelle. Par la notion de la substance ou de l'estre accompli en

すでに見たように、ライプニッツにおいて、個体実体は、他の実体の働きを受けることも、また、他の実体に働きを与えることもない。それでもなお、我々が経験により知っている、実体同士の相互交渉が成立するのはなぜか。それは、ライプニッツによれば、「個体実体の概念によって、各個体実体は、そしてあらゆる魂は、本性上世界を表現する」からである。ライプニッツによれば、個体実体が、自己の個体実体概念のうちにそれぞれ含んでいるのは、自己の過去、現在、未来である。こうした自己の変化はすべて連続的に以前の状態から生じる。この変化をすべて有しているのが、個体実体の概念である。そして個体実体は、こうした自己の変化連鎖に伴って世界全体の変化も、その概念に含む。このとき、個体実体は、どれも、同じ世界を、その概念に含むことになる。

このように、個体実体同士は、互いの働きかけがなくても、個体実体の概念に含まれている、自己の変化のみで、同一の世界の変化を共有する。このように同一の世界の変化を共有する限りで、個体実体は、相互に交渉を持つのである。このことをライプニッツは、「どの実体も、自身の観点、ないしは、自身に固有な関係にしたがって、世界のすべての連関を表現しているので、実体同士が完全に一致する、ということが生じる」¹⁰という。

このように、互いの働きかけがなくても、それぞれの個体実体概念によって、同一の世界の変化を含むことで、結局、実体同士の変化が一致する。このことは言い換えれば、実体同士の変化の一致は、それぞれの個体実体概念のうちにすでにあらかじめ含まれていたことに等しい。このように、実体相互の関係が、あらかじめ各実体の概念にそれぞれ含まれているということは、各実体の、相互の働きかけを不要にすると同時に、各実体の相互の結合を可能とするのである。

このように、他との関係をすべて、あらかじめ、その概念のうちに含む、個体実体の特性に基づいて、個体実体同士の結合関係は説明される。そして、こうした個体実体の特性に基づいて、実体結合を説明する理論を、ライプニッツは、実体の「併起説」ないし「予定調和説」と呼ぶ。

予定調和説は、他との関係をすべて、あらかじめ、そのうちに含んでいる、個体実体の概念の特性に基づいて、個体実体同士の結合を説明する説である。したがって、予定調和説にとって、個体実体概念は、その根幹を成すものといえる。実体の結合が予定調和説によって説明できるとは、結局、実体の結合は、個体実体の概念から説明できることに等しいのである。

general, qui porte que tousjours son état present est une suite naturelle de son état précédent, il s'ensuit que la nature de chaque substance singuliere et par consequent de toute âme est d'exprimer l'univers; elle a est à d'abord crüe de telle sorte qu'en vertu des propres loix de sa nature il luy doit arriver de s'accorder avec ce qui se passe dans les corps, et particulièrement dans le sien, il ne faut donc pas s'etonner qu'il luy appartient de se représenter la piqueure, lorsqu'elle arrive à son corps'.

¹⁰ Remarque sur la lettre de M. Arnauld, touchant ma proposition : que la notion individuelle de chaque personne enferme une fois pour toutes ce qui lui arrivera à jamais, 1689.6, GP.II.47.

: '... Il se fait suivant l'hypothèse de la concomitance, qui me paroist démonstrative. C'est à dire chaque substance exprime toute la suite de l'univers selon la vue ou rapport qui luy est propre, d'où il arrive qu'elles s'accordent parfaitement...'

ライプニッツは、心身の関係についても、予定調和説によって説明できると断言する。彼は、身体の状態（刺されること）と魂の状態（痛み）の結合関係を、以下のような図を用いて説明する。

瞬間 A の身体の状態		瞬間 A の魂の状態
つづく瞬間Bの身体の状態（刺されること）		瞬間Bの魂の状態（痛み） ¹¹

この図を説明して、ライプニッツは、「瞬間Bの身体の状態は、瞬間Aの身体の帰結であるように、瞬間Bの魂の状態は、実体一般の概念にしたがって、先立つ瞬間Aの、同一の魂の状態の帰結である¹²」と述べる。ライプニッツによれば、魂の現在の状態変化は、他の存在の働きによるものではない。したがって身体の働きによるものではない。魂の自身の現在の状態は、魂の以前の状態の帰結であるという。このことは身体の場合も同様である。身体の現在の状態は、身体の以前の状態の帰結であり、魂をはじめとする他の存在によるのではない。

さて、上の図が明らかにしているのはこのことだけでない。心身は、それぞれ自律的な存在であり、相互に依存しないにもかかわらず、心身は、一方の変化に応じて他方が変化するという、密接な対応関係にあることが、上の図から明らかである。そしてこのような密接な心身の対応関係こそ、心身の結合と彼が呼ぶところのものである。心身は、相互の働きかけを行わないにもかかわらず、相互に結合するのである。

心身は、相互の働きかけを行わないにもかかわらず、心身は、相互に結合する。そして彼は、このような心身の結合は予定調和説によって説明されると断言している。そうだとすれば、心身は、それぞれ異なる個体実体だということになりはしないか。なぜなら、先に見たように、予定調和説とは、他との関係を、あらかじめその概念のうちにすべて含む、個体実体の特性に基づいて、異なる個体実体同士の結合を説明する説だからである。

ところが、予定調和説によって説明される心身は、二つの異なる実体である、という論には、困難な点がある。それは、身体と魂が、二つの異なる個体実体であるならば、これらが一つの個体実体になることはいかにして可能か、理解できなくなる、という点である。心身が二つの実体であるならば、どれほどこれら実体が密接に結合してしようと、これらは一つの実体にはなりえない。このような論は、ライプニッツの論敵の一人だった、イエズス会士のトゥルヌミーヌが、後年、予定調和による心身の結合は、「真の結合」を意味していないとして批判したポイントで

¹¹ 『ライプニッツ＝アルノー往復書簡』（1687年10月9日）,GPII,pp.113-114 :
 Etat des corps au moment A | Etat de l' âme au moment A
 Etat des corps au moment | Etat de l' âme au moment B
 suivant B [piqueure]. | [douleur].

¹² Ibid. 'Comme donc l'état des corps au moment B suit de l' état des corps au moment A, de même B état de l' âme est une suite d'A, état précédent de la même âme, suivant la notion de la substance en general'.

あった¹³。

そして、実のところ、心身を異なる二つの個体実体とみなす、という理解は、ライプニッツ自身の理解でもない。彼にとって、心身は、二つの異なる個体自体ではない。個体実体とは、ライプニッツにとって、心身を兼ね備えた存在者を指すからである。心身は、異なる個体実体ではない。そうだとすると心身はどのような関係にあるのか。

3. 心身の統一

個体実体とは、心身を兼ね備えた存在者である。したがって、心身は、ライプニッツにとって、二つの個体実体を意味するのではない。では、彼にとって心身はどのような関係にあるのか。ここでライプニッツは驚くべき方向をとる。ライプニッツは、心身のうち、魂のみを、個体実体と認める、という道をとっているからである。

個体実体の概念と予定調和説の関係性について説明されていた、一つ前の引用をもう一度思い出してみたい。彼はこう言っている。「実体の概念によって、各個体実体、そして結果的には、あらゆる魂は、本性上、世界を表現することになる」。ここから明らかのように、個体実体として認められているのは、魂のみである。したがって、身体は、彼にとっては個体実体ではないのである。

魂は個体実体であるのに対し、身体はそうではない。そうすると、魂という個体実体にとって、身体は、まったく不要な存在だということになりはしないか。というのも、個体実体と同一視される魂は、他のものの働きをまったく必要としないからである。ゆえに、身体は、魂にとって不要だと考えられるのである。

身体は、魂という個体実体にとって不要である。もしそうだとすると、身体は、魂とともに一つの個体実体になるという、ライプニッツの見解を、我々はどう解するべきか。このことについて、ライプニッツは、興味深いことを述べている。「魂の状態は、本来的かつ本質的に、世界の、（魂に）対応する諸状態を表現し、特に、魂に固有である身体の状態を表現する」。彼によれば、魂は、世界のすべての状態を表現するものである。が、「特に、魂に固有である身体の状態を表現する」¹⁴。魂が「表現する」とは、個体実体である魂が、その概念のうちに、自身に生じることを含んでいることにほかならない。魂は、世界のすべての状態を表現する以上、魂は、身体もむろん同様に表現する。このように魂が表現するものである、という点では、身体も、それ以外

¹³ 『トレヴー学報』「心身の結合に関する推論」' Conjecture sur l'union l'âme et du corps. Par le P. Tournemine', *Journal de Trévoux ou Mémoires Pour Servir à L'Histoire Des Sciences Et Des Arts*, Mai. 1703, pp.869-870.(Slatkine reprints 1968): 「(心身の) 予定調和は、本質的な意味での結合ないしは結びつきではない。二つの時計のうちどれほどの類似性を仮定しようと、また、両者の対応がどれほど完全にぴったりしていようと、それらの時計の一方が他方に完全な釣り合いを保っている、という理由からは、それらの時計が結合するとは決していい得ないだろう」。

¹⁴ 『ライプニッツ＝アルノー往復書簡』(1687年10月9日), GPII, pp.113-114. : 'Or les états de l'âme sont naturellement et essentiellement des expressions des états repondans du monde, et particulièrement des corps qui leur sont alors propres'.

の存在者も変わることはない。しかし、身体は、魂にとって、魂が表現する世界の状態の中でも特別な位置にあるとライプニッツはいう。

身体は魂にとって特別なものである。このことを示すのが、「魂に身体は固有 *propre* なもの¹⁵ である」というライプニッツの表現である。このことを、ライプニッツは、「有機体には、魂の視点が内在している」¹⁶とも言う。有機体とは身体と異なるものではない。では、このような表現によってライプニッツが意味している、身体と魂の特殊な関係とは、どのようなものか。このことに対する、ライプニッツの答えは、次のようなものである。

我々が他の物体を意識するのは、それら物体が我々の身体に対し持っている関係によってでしかない。だから、魂が我々の身体に属するものを（他のものより）表現するのは、理にかなっている。我々が土星や木星の諸衛星を知るのも、我々の眼に生じる運動にしたがってでしかないのである¹⁷。

「我々が他の物体を意識するのは、それら物体が我々の身体に対し持っている関係によってでしかない」とライプニッツは言う。ここでいう「意識」の働きは、明らかに、魂の働きである、知の働き、ここでは特に、感覚によって得られる知を意味していると思われる。彼によれば、魂が、（身体以外の）物体を知るのは、当の物体に身体がかかわることによっている。物体を知るという仕方で、魂が物体にかかわるには、物体に身体がかかわることが決定的な意味を持つというのである。このことを説明するのに、ライプニッツは、星の運行を、我々が知るケースを例に挙げる。星の運行とは、物的なものである。こうした物的な星の運行を、我々が知るのは、星の運行を、身体的器官である眼で見ることによっている。このように、身体の他の物体へのかかわりは、魂の他の物体へのかかわりを決定する力を持つ。この意味で、身体の他の物体へのかかわりは、魂が他の物体にかかわりにとって不可欠である。ちょうど、眼で星の運行を見ることが、我々が星の運行を知ることにあって不可欠であるように。

さて、どうして魂は、他の物体とかかわるのに、身体を必要とするのか。この理由についてライプニッツは委細を述べていない。しかし、この理由を考えることは、魂と身体とが一つのものとみなされる根拠を見出すことにつながるとと思われる。

¹⁵ この箇所は、'*des corps qui leur sont alors propres*'と記されている。les corpsは「諸物体」とも解釈しうるが、ここでは「身体」と理解した（通常、身体は le corps）。

¹⁶ *Systeme nouveau pour expliquer la nature des substances et leur communication entre elles, aussi bien que l'union de l'âme avec le corps.* (1695), GP.VI,p.484. 'De plus, la masse organisée, dans laquelle est le point de vue de l'âme, estant exprimée plus prochainement par elle...': 「有機体には、魂 *âme* の視点 *point de vue* が内在しているのだが、有機体は、魂によって、（他のもの）より近接的な仕方で *prochainement* 表現される」。

¹⁷ 『ライプニッツ＝アルノー往復書簡』（1687年10月9日）,GP.II.pp.113: 'Or puisque nous ne nous apercevons des autres corps, que par le rapport qu'ils ont au nostre, j'ay eu raison de dire, que l'âme exprime mieux ce qui appartient à nostre corps, aussi ne connoist on les satellites de Saturne ou de Jupiter que suivant un mouvement qui se fait dans nos yeux'.

なぜ魂は、他の物体とかかわるのに、身体を必要とするのか。このことは、魂が、物的なものではないにもかかわらず、物的なものともかかわることを考えれば明らかになると思われる。魂は、物的なものではない。にもかかわらず、魂は、世界にある諸物体とかかわる。このことは、魂が、世界の事象連関をすべて自己の概念に含んでいる個体実体であることから言いうることである。さて、このような物的でない魂が、諸物体とかかわるためには、魂は、これら物体のおかれた世界に、自身も、物的な場所を有していなければならない。このように、魂が、諸物体とかかわるために、この世界に有している物的な場所が、身体なのである。

以上から明らかなように、魂が、身体を求めたのは、魂が、世界に自己が存する物的な場所を求めたからである。こうした魂の場所になるのが、身体なのである。このように魂の場所として身体があることで、魂は、或る意味で、物的なものとなりうるのである。

さて、魂は、世界にある諸物体とかかわるための物的な場所として、身体を必要とする、という、こうしたライブニッツの心身理解は、魂と身体が一つのものだとするライブニッツの考えの解明に光を当ててくれると思われる。

すでに見たように、身体は、この世界における魂の場所である。そして身体自身、当然のことながら、この世界に場所を持つ。こうした、身体と魂の場所と、魂のある場所は、異なるものではない。世界においては、身体と魂は、同じ場所にあるのである。このように、魂と身体が世界の同じ場所にあるとは、世界においては、魂と身体は異なるものではない、ということに他ならない。そして、世界においては、魂と身体は異なるものではない、という、このことが、結局、魂と身体が一つのものであることを可能にする。世界においては、身体と魂は同一の個体実体なのである。

4. 再び予定調和説へ

すでに見たように、ライブニッツにとって個体実体とは、個体実体は魂のみを意味しており、身体は、それ自体としては、個体実体ではない。それにもかかわらず、しかし、心身は、それらが世界のうちに置かれたとき、心身は、同一の個体実体を意味することになる。

このように、心身を同一の個体実体にするのは、心身と世界との関係である。さてここで、心身を同一の個体実体だと結論する、これまでの過程において、予定調和説は、心身が同一の個体実体となるための原理としては、登場していなかったことに気付く。心身を同一の個体実体にするのは、世界のうちにある諸物体と心身の関係であり、予定調和説ではない。予定調和説とは、異なる個体実体の結合を説明する説だった。それゆえ、心身は、予定調和説によっては、その結合が説明されない。なぜなら、心身は、異なる個体実体の関係にはないからである。

心身を同一の個体実体とする原理は、予定調和説ではない。しかしそうだとすれば、なぜライブニッツは、予定調和説を、心身関係を論じるのに有効だと考えたのか。ここでもう一度、心身の相互関係（身体の状態（刺されること）と魂の状態（痛み）の一致）の説明を思い出したい。

ここでは、身体の変化推移に注目したい。身体は、魂の変化にぴったり並行して、変化を起こしている。そして身体が並行的変化をするのは、身体が、魂から独立した、自律的な働きを持っているからだと言いつつは考える。身体も、働きの自律性を有しているのである。ここから、我々は、身体も、魂と同様、個体実体であると推論したのだった。働きの自律性を有するのは、個体実体の特性だったからである。しかし、すでに確認したように、言いつつにとって身体は、それ自体は、個体実体ではない。ではなぜ、身体は、魂と関連付けられたときには、あたかも個体実体のごとく振舞うのか。

ここで気付かれるのは、身体が個体実体のように振舞うのは、身体が魂と関連付けられたときだということである。身体はそれ自体では個体実体ではない。しかし、身体は、魂と関連付けられたとき、自身も個体実体に等しいものになるのである。このことは一見パラドキシカルに思われるかもしれない。しかし、直前の章で論じたこと、すなわち、身体は、魂が世界とかかわりを持つための場所である、ということを考えてみれば、このことは理解可能になると思われる。

魂は、世界の諸物体とかかわりを持つために、世界に存する、物的な場所を要する。このように、魂が世界のうちに存するための場所が身体である。このように、身体に存することで、世界に物的な場所を持つ魂は、或る意味で、物的なものといえる。

魂は身体に存する、という限りでは、魂は、或る意味で物的なものといえる。これと同じことが身体についても言いうると思われる。すなわち、身体は、魂がその内に存するときには、身体は、ある意味で、魂に等しいものになるのである。

このように、心身は相互に区別されながらも、それらが共存するときには、心身は、相互のあり方をそれぞれに共有する。魂は身体的なものになり、身体は魂に等しいものになる。そして、魂に等しいものになるとは、個体実体に等しいものになることに他ならない。ここから、身体は、個体実体に等しいものになるのである。

心身は、相互に区別されながらも、それらが共存するときには、心身は相互のあり方をそれぞれに共有する。このような心身の関係を、個体実体を基点にして見てみよう。すると、心身は、それらが共存するときには、魂は個体実体であるのは無論のこと、身体もある意味で個体実体である。このような共存においてもなお、心身は本性上相互に区別されているのだから、心身が個体実体であるのは、それぞれ別の意味においてだということになる。ここにおいてようやく、心身を、異なる個体実体の関係として理解される道が開ける。予定調和説は、心身が共存しているときに、心身がそれぞれ有している個体実体としてのあり方を結合する説なのである。

まとめよう。

身体、すなわち、物体は、デカルトにおいては、延長するものであり、思考するものである魂と完全に区別されるものであった。が、言いつつにとっては、物体ないし身体は、単に延長

するものではない。彼にとって、物体ないし身体は、事実、ライプニッツは、「機械論の原理そのものを探求して、経験が教えてくれる自然法則を説明しようとしたとき、「延長体 *masse etendue*」の考察だけでは十分でなく、「力」の概念を用いなければならない」